

223

2024.11.17

長崎郵趣

第2次昭和切手20銭 伊藤純英



第2次昭和切手20銭

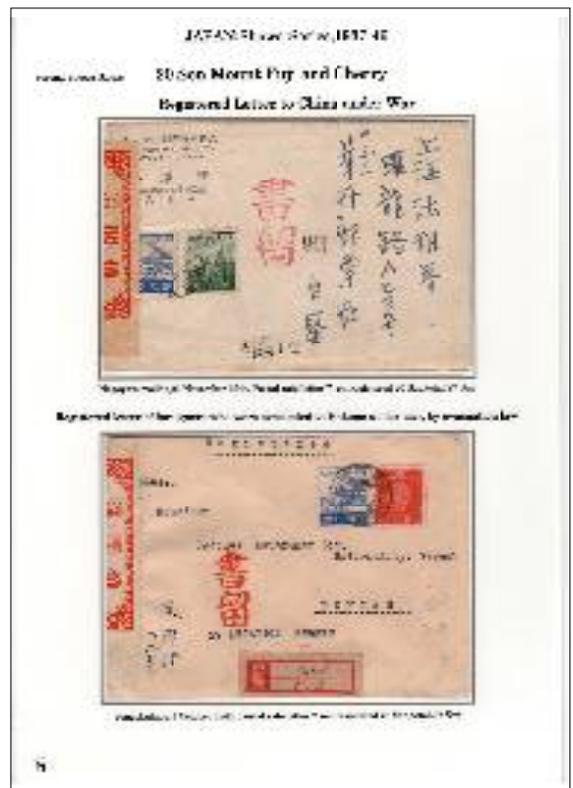
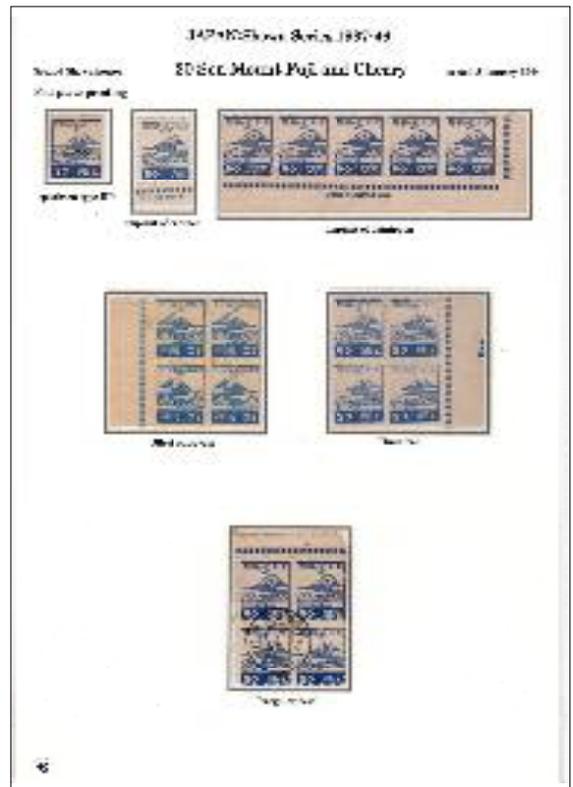
伊藤 純英

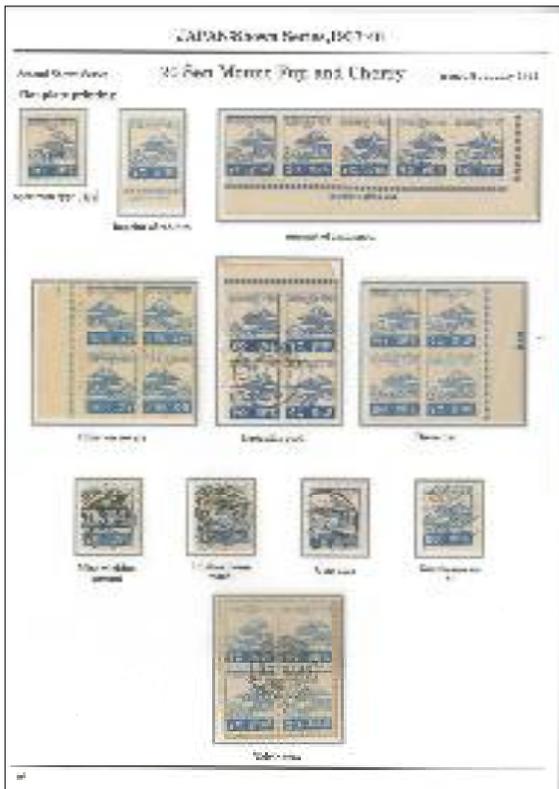
とうとう原稿のストックが尽きた。ということで困ったときの昭和切手。毎月第3日曜日は長崎支部の例会だが、実はこの第3日曜日はもう一つの例会がある。ZOOM昭和切手例会が21:00-22:30頃まで行われているのだ。この中で、毎月額面順に私が解説することになっている。第1次昭和切手5厘から始まって、今月は第2次昭和切手20銭切手である。ということで、今晚のレジュメも兼ねて原稿を仕上げてみることにした。

表紙のカバーは、外信書状料金20銭として1枚貼ったものである。基本的な使用例だからたくさんあるだろうという見方は当てはまらない。なぜか？1次昭和20銭がかなり遅くまで印刷され、それが郵便局に配給され、多くはスイス宛の外信便に使用されたからである。外信便に貼られたこの1次昭和20銭の色は3番目の色が最後期4番目の水色である。ということで1次昭和20銭の使用時期別カバーとしては、スイス宛のカバーは必要不可欠のものとなる。

ではどれくらい存在するのであろうか。寡聞にして林コレクションのものぐらいしか思いつかない。未知のものも含めて片手の数くらいあるのだろうか？

見てのとおり消印の状態もよくない。しかし0と1の違いは大きなものである。とりあえず貼るしかない。裏面も掲示する。





前のページがPhilanippon2021作品で、上のリーフがPhilanippon2011作品である。

この10年間の違いは、単片の消印違いを外したことで、戦時中の中国宛外信便が入ったこと。ただしこの外信便は上下2通とも、中国宛の日本国内料金同値の書留便であるということである。上は上海の切手商宛という点と、下が戦時外国人箱根疎開のドイツ人差出という点が違う。次回作成するリーフは、上の切手商宛を外し、表紙の単貼スイス宛と入れ替える構想を持っている。ただどちらも住所は、仙石原という点で同じだが、スイス宛は横浜の欧文印抹消になっている。幸便で横浜まで運んだのだろうか。

【在日外国人の箱根疎開】

戦局が切迫した昭和19年、外務省は空襲時における在京外交官とその家族の避難に関し、関係諸官庁と協議の結果、疎開場所を箱根と軽井沢に決定、箱根では富士屋ホテルと強羅ホテルを指定した。

富士屋ホテルを宿舎としたのは、ドイツ、イタリア、タイ、ビルマ、フィリピン、満州国、中華民国の大使館員及び武官であった。一方、強羅ホテルには、十九年末にマリク駐日大使以下ソ連の関係者二〇〇名が収容されたが、防空訓練に参加するなど住民との間に友好的交流もあったという。当時は既に食糧、燃料等の諸物資が乏しくなっていたが、政府の命令によって行われたこれら外交官の疎開に対しては特別の増加配給が配慮された。

昭和二十年、米軍機による本土空襲が激しくなると、政府は東京、横浜などに居住する一般外国人をも箱根と軽井沢に集結する方針をとったので、富士屋ホテルは同年三月末日限りで一般客の営業を停止し、全館を外国人の収容にあてた。その他、万岳楼の貸別荘や仙石原高原、湖畔、小涌谷などにも枢軸国の外交官や民間人の数家族が疎開したので、外務省は昭和二十年五月、富士屋ホテル内に箱根事務所を設置し、大使館関係や一般疎開外国人との連絡業務に当たった。

<https://www.hakone-ryokan.or.jp/hakopedia/641.html>